[自主研究]

生態園における昆虫類等多様性モニタリング調査

嶋田知英 小川和雄 三輪誠 長田泰宣

1 目的

埼玉県環境科学国際センター内にビオトープとして整備された生態園は、今後、様々な昆虫や鳥類が侵入定着し、新たな生態系がかたち作られることが期待されている。

そこで、生態園管理のための基礎的資料を得るとともに、新たなビオトープ創造に必要な情報を収集するため、野生生物の発生経過を調査した。

2 方法

2.1 鳥類調査

生態園における鳥類の生息種数、個体数を、ライントランセクト法を用いて調査した。調査は 2000 年 4 月 14 日から概ね週1回行った。また、定期調査以外にも、適宜生態園内を巡回し、出現した鳥類の種類を記録した。

2.2 昆虫調査

鳥類調査と同時に、目撃したチョウとトンボの種類を記録した。また、定期調査以外にも、適宜生態園内を巡回し、出現したチョウ及びトンボの種類を記録した。

3 結果

3.1 鳥類調査

2000 年 4 月より 2001 年 2 月までの間に、計 30 種の鳥類が確認された(表 1)。多くは県東部地域で普通に見られる種であるが、ハヤブサやカワセミなどレッドデータブックで希少野生生物とされる鳥類が6種確認された。

最も優先していた種はスズメで、全観察個体数の 37.7%を 占め、続いてヒヨドリ 16.6%、ムクドリ 11.2%であった。

3.2 昆虫調査

2000 年 4 月より 2001 年 2 月までの間に、チョウ 26 種、トンボ 14 種が確認された(表 2)。また、アオスジアゲハ、ツバメシジミ、ヤマトシジミ、ルリシジミ、ベニシジミ、ヒメジャノメ、キチョウ、キタテハ、ゴマダラチョウ、コミスジ、ヒオドシチョウ、アジアイトトンボ、アキアカネ、ナツアカネ、ウスバキトンボ、シオカラトンボ、ギンヤンマ、オオヤマトンボは生態園内で幼虫が確認され定着しているものと考えられた。

4 今後の研究方向性当

継続的に調査を行い、経時的な動物相の変遷や、植生との 関連等について検討する。

表1 埼玉県環境科学国際センター生態園における鳥類の消長

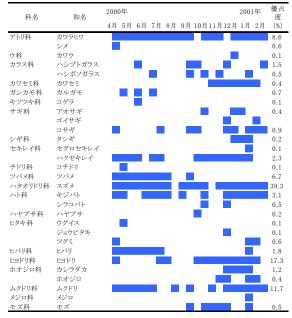


表2 埼玉県環境科学国際センター生態園における昆虫の消長



※ ■は調査時に各種が確認されたことを示す。